

続

心が育つということ

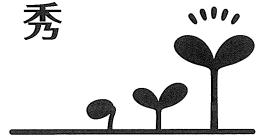
外に向かう気持ち・内に向かう気持ち

豊田一秀

わが家の子育ての真っ最中であつたころのことで、今でもはっきりと心に残る出来事がある。それは小さな出来事であつたが、人が育つということに関して、その後の私に大きな示唆を与えた。

長男が三歳半の時、皆で山登りをした。大人なら小一時間で登れる小山だったが、長男はわれわれの励ましに答え、行き帰りすべてを歩き通し、両親も本人も大満足の一日であつた。しかし、その夜、長男はひどい夜泣きをして、「さびしい！」を連発したのだつた。昼間の山登りでは大きな達成感があつたはずなのに、いったい何が寂しかったのだろうか。それとも、ただ、単に身体が疲れたことに起因する不機嫌だったのであろうか。

わき起こつた疑問は、子どもは自分の成長を常に喜んでいるのかという問いである。一般人や親は、基本的に子どもの成長を期待し、喜ぶ。すなわち、成長を「得るもの」「できるようになること」として、プラスに考えているのではないであろうか。そして、親は、子どももまた自分と同じように自身の成長を喜んでいると考えがちである。しかし、そのように、成



長に対して親子の喜びが常に一致していると単純に考えてしまってもよいのだろうか。

親や教師にとって「喜び」であった子どもの成長は、もしかすると子どもにとっては失うことへの「痛み」として感じられることもあるのではないか、そして、これは、ある意味で人間が避けられず負っている本質的な痛みなのではないか。この疑問は、その後も子育ての中、幼稚園での保育の中と、さまざまな場面で私に迫ってきた。では、人は育つ中で何を失うというのか……。

このことを考える前提として、私には一つの思いがある。それは、人間は、いつでも何かに「包まれている」と感じていないと生きていられない存在ではないかということである。胎児の時は母親の胞衣（えいな）に包まれ、誕生後は母親に包まれ、次には家族に包まれ、社会に包まれ、世界に包まれ、最終的には宇宙に包まれていると感じること、すなわち、包まれているという感覚の対象を、胞衣から宇宙に広げていく過程の中に人間の成長があるのではないかと私は考えるのである。ここでいう「包まれる」とは、抽象的な概念であるが、あえて言うならば、守られている感覚、愛されている感覚、つながっている感覚、コントロールできる感覚、認められている感覚……とでも表現できるだろうか。

胎児は、胎内で十分に育った結果、月が満ちてこの世に生まれてくるのであるが、これを象徴的な「捨て子体験」ととらえることもできよう。新生児はそれまで住んでいた胎内という「楽園」を追われ、この世に捨てられたのである。母の羊水の中で、胞衣に包まれて過ごしていた日々は、人にとって、ある意味、人生で最も満たされた日々であったかもしれない。新生児は誕生によって、それまで自分を包んでくれていたものを失ったのである。これが、私の考える

原初的な喪失による痛みである。

この、人生初期の喪失の痛みを和らげようと努めるのは主に母親である。母親は新生児を抱き、授乳し、新生児を包み、安心できる世界をつくるべく最大限の努力を惜しまない。新生児は、新たに自分を包むモノを得、安住の地を得るのである。乳児の生命力、強い視線、ほほ笑み、自分を通す泣き声……乳児は、ほとんどすべてを母親に依存している存在であるにもかかわらず、実に堂々と立派に生きていると、私はある種の畏敬の念をもって新生児を見ることがある。

しかし、どんなに母親が努力をしたとしても、新生児にとって、胎内に住んでいた時に得ていた母との絶対的な一体感に比べれば、この世は何とも危ういものに感じられるのではないであらうか。なぜならば、新生児は母親から切り離された別個の存在——個人——として、呼吸をし、食物を食べ、排泄をし、寒暖に耐え、生きていかなければならないからである。

人間は、自分を包むモノを宇宙にまで広げようとする意思・願望をもつと同時に、それと相反する根源的な願望、母親の胎内に帰還したいという願望をもち合わせている存在のように私は考える。

話を山登りに戻すと、長男の夜泣きは、「包まれている」という安心感が危うくなったというサインであったかもしれないと、今にして私は思う。自分で山登りができたという喜び、自信とは相反する気持ち……自分ができてしまった哀しさ、親との一体感を失う寂しさ、親に包まれているという感覚の危機と言ったらよいであらうか……。

このように見てみると、どのようにして、子どもの、成長に伴う痛みを軽減し、成長の喜びを保障していくのが、育てるものに負わされている大問題のように思う。自分が「包まれている」という感覚の保持、成長への期待という視点から考えてみたい。

第一に、子どもに安心感を保障することが大切であろう。成長が孤立を意味するものではない、すなわち、できるようになることが、今、包まれているものを失うことではないという安心感を子どもがもてるようにすることが大切であると思う。換言すれば、いつでも戻る場所があるという確かさを保持する援助といえるかもしれない。

第二に、自分の意思で、より大きな世界に出ようとするとその機会を尊重することが大切である。自分で飛び立つ時を決めることができ、今の状態から無理に追い出されないこと、成長をせかされないことが大切である。

第三に、より大きな世界に対する不安を減らし、期待をもたせるような働きかけが大切であろう。

第四に、育つということ自体の中に相反して存在する両義性、すなわち「得ることの喜び」と「失うことの痛み」に大人が気付き、共感し、子どもが孤立しないように支えることが大切であろう。

こうして考えると、母親の第一の仕事は、赤ちゃんに「お母さんのお腹の中は良かったが、この世も、そう悪くはない」と思ってもらえるようにすることであるといえるかもしれない。

特に現代は、子どもの内面の育ちを大切にしながら、ゆつくりと子どもを育てられる大人の賢さが求められているのだと思う。

(玉川大学)